

石川佳純
(全農)女子
シングルス
優勝

強気なプレーと
強い気持ちで54年ぶりの
3冠女王誕生!!



優勝を決め、ベンチの陳莉莉コーチと抱き合う

福原愛(ANA)が大会直前に欠場。女子単、石川が優勝の本命となった。

今回、石川は、混合複、女子複、女子単の3種目に出場。混合複、女子複では優勝。54年ぶりの3種目制覇に向けて、残す最終日は、女子単だけとなった。

3冠をかけて迎えた最終日。準決勝の相手は、高校生の前田美優(希望が丘)。前田の打点の早い両ハンド攻撃に石川は苦戦し、ゲームカウント1-3と劣勢。石川はなんとか2ゲームを取り返し、ゲームオールに持ち込むが、最終ゲームも8-9とリードを許す。しかしここで負けないのが石川。ここから思い切りの良い強気な攻撃的プレーをみせ挽回。勝利する。

「劣勢の展開となりましたが、最後まで負けることは考えていなかったです。ここから、ここから、と思ってプレーしました」と試合後に振り返った。

決勝は、同級生の森園美咲(日立化成)だ。

1ゲーム目は、石川のサービスからの展開が良く決まり、7本で取る。

2ゲーム目、森園が会心のプレーで、6-0とリード。そのままリードを保ち、11-2で森園が取る。

ここから接戦になるかと思われたが、3ゲーム目以降は、石川が戦術を立



て直すと、サービスからの攻撃がよく決まり、8本で取る。

ゲームカウント2対1とリードしたこと、4、5ゲーム目は石川本来の躍動感あるプレーで主導権を握り、涙の3冠を達成した。

「いろいろな試合がありましたけど、みんながここまで向かってくるとは思わなかったです。どの対戦相手も強かったです。ただ、今大会負けなかった、ということはとても自信になりました」と石川。

「石川選手はまだまだ若い。もっと練習をやり込めばもっと強くなると思います。今後は、厳しい練習に耐えられる体力、筋力が必要になってくると思います」と陳莉莉コーチ。

石川は、今回の全日本選手権で17試合をこなした。女子シングルス決勝は17試合目であったが、今大会最高のパフォーマンスを見せた。54年ぶりの3冠達成とともに、大きな自信を得たに違いない。次は世界の頂点を目指す。

男子
シングルス
優勝水谷隼
(beacon-LAB)

積極的な
攻撃プレーで
水谷が2年連続
7度目の優勝



平成26年度全日本選手権 男子決勝。水谷隼は、平成18年から9年連続で決勝に進出を果たした。

ルール変更に伴い、今年の全日本選手権はプラスチック製ボールの使用が決まり、選手は用具、フォームの調整に直前まで悩んでいた。

ランク決定戦。水谷は、笠原弘光(協和発酵キリン)と対戦。笠原は、水谷が普段使用していないボールを選択。勝ちにこだわった。その影響か水谷は普段のプレーが出来ず苦戦。勝利はしたが、ゲームオールジュースであった。

そこから水谷は好調なプレーを見せる。6回戦では、ITTFワールドツアーアークランドファイナルで接戦となった森園(明大)、平成23年度全日本選手権決勝で敗れている吉村(愛工大)に勝利する。

準決勝の対戦相手は、普段から練習し慣れている岸川聖也(ファースト)。接戦となると思われたが、水谷は、普段とは違う戦術で試合に挑むと、ストレートで勝利。力の差を見せた。

迎えた決勝。相手は、強豪を連破し勢いにのる神巧也(明大)。

第1ゲーム、神の勢いのつた両ハンド攻撃に、やや受け身になった水谷は、8-4とリードを許す。このまま第1ゲームは神が取ると思われたが、そこから水谷が目醒めるようなプレーで挽回。1ゲーム目を取る。第2ゲーム目以降は、水谷のペース。神が素晴らしいプレーをみせるが、水谷が

それを上回るプレーをみせ、譲らない。結果、水谷はペースを崩さず、ストレートで勝利。7回目の王者に輝いた。

結果論であるが、勝負は第1ゲームにあつたと思う。勝負に「たれば」はないが、もし第1ゲーム目を神が取っていたら……。

水谷は、フォアハンドに加え、バックハンドが昨年以上に成長していた。特に、前陣での早い打点での攻撃や、威力あるバックハンドドライブは今までになかった姿ではないか。

「攻めの早さを意識して練習に取り組んできました。攻めの早さは中国選手の特徴でもあり、早さと威力あるボールが打てると思います。

去年も全日本を優勝できて良い一年になった。今年もこの優勝をきっかけにして、世界選手権に向けて良い結果が出せるように頑張っていきたい」と水谷。

日本のエースがまた一つ、優勝のタイトルを獲得した。



Doubles

男女複・混合複

松平 賢二(右)・若宮 三紗子 Mixed
(協和発酵キリン・日本生命)

「決勝を想定していて、細かい部分の作戦は良かったです。次に生きる敗戦だと思います」 準優勝

中村 薫子(右)・市川 梓 Women's
(日立化成)

昨年度の表彰台ペア。今回も中村の変化プレーと、市川の思い切りの良い攻撃が決まり、2年連続で表彰台に上がった。ランク3位

張 一博(左)・高木 和卓 Men's
(東京アート)

社会人優勝ペア。張の手堅い攻撃と、高木和の回転量の多いドライブ攻撃が噛み合い、上位進出。ランク4位

森蘭 政崇(左)・三部 航平 Men's
(明大・青森山田高)

昨年度優勝のコンビは、今年も抜群の安定感を見せて連覇達成。特に決勝ではお互いに打点の早い攻撃をみせた 優勝

田添 健汰(右)・前田 美優 Mixed
(専修大・希望が丘)

元・混合複優勝ペア。前田のバック表ソフトラバーでチャンスを作り、田添のドライブ攻撃が冴えた。ランク3位

田代 早紀(前)・藤井 優子 Women's
(日本生命)

コンビネーションが良く、回転量の多い両ハンド攻撃が特徴のペア。今回も積極的に攻撃を仕掛け、ラリー戦で得点をあげた。ランク4位

石川 佳純(左)・平野 早矢香 Women's
(全農・ミキハウス)

お互いがしっかりと役割を果たすなど、抜群のコンビネーションを見せた。決勝は接戦になるも粘りのあるプレーで勝利、連覇を達成 優勝

水谷 隼(左)・岸川 聖也 Men's
(beacon.LAB・ファースト)

あうんの呼吸のプレーで、プレー領域を選ばない2人。しかし決勝は、持ち味を発揮できなかった 準優勝

時吉 佑一(左)・山梨 有理 Mixed
(ZEOS・ミズノ)

ダブルスが上手く、動きが早く、決定打、チャンスメイクができる2人。リズムある攻撃も魅力。ランク4位

吉村 真晴(左)・石川 佳純 Mixed
(愛工大・全農)

序盤は苦戦するものの、徐々に噛み合いですと、素晴らしいプレー展開。お互いの特徴を生かしたプレーで、悲願のペア初優勝を達成

阿部 愛莉(右)・森蘭 美月 Women's
(四天王寺高)

フォアハンド攻撃が良く、特に阿部のスマッシュ攻撃と森蘭のコースを突いたドライブが光り、優勝してもおかしくなかった。準優勝

吉村 和弘(右)・平野 晃生 Men's
(野田学園高)

台上レシーブがうまく、ラリー戦にも強いペア。またお互い、強力な両ハンドも特徴。ランク3位